Osaka University Knowledge Archive

Title	大阪大学史紀要 第2号 大阪大学五十年史編集だより(部局史)
Author(s)	
Citation	大阪大学史紀要. 1982, 2, p. 99-105
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/21833
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

部局史編集雑感

人間科学部

水子の供養

徳永　恂

人間科学部の歴史は浅い。来年でようやく10年になろうとするところである。だから医学部など古い学部で、枚数の不足に悩まれた話など伺うと、それなら少しお裾分けしてもよかったのに、と考えたりする。しかしだからと言って書くことがなかったと言うのではない。むしろ逆で、書きたいことは山ほどあり、書いて見たい書き方もいろいろあったのに、結局何も書けなかったな、というのが率直な感想である。

聞く所によると、中国の歴史叙述には、正史、裏面史、それにさらに門外不出の起居註という三段階の叙述があるのだと言う。私たち部局史の委員（徳永、田中清、糸魚川、阿部）がとくに意をそそいだのは、学部成立のプレヒストリーに関する資料の収集だった。そのためには関西地区に居られる方ばかりではなく在京の名誉教授の方々をもお訪ねして談話を記録させていただいたし、当部の創立に尽力しつつ亡くなられた森昭教授の遺族にお願いして、貴重な記録類を提供していただいたりした。そうしてどうやらすでに埋れかけていたプレヒストリーを再構成するだけの資料が集まった時には、謎解きを果たしたようなよろこびさえ感じたものである。しかし出来上ったものは、教授会議事録や学生便覧の抜き書きのような味もそっけもないものになってしまった。書かれた歴史というものが、いかに多くの埋もれた暗闇に当てられた一面の光でしかないかを痛感させられる。

しかし今回の部局史の編集を機縁にして、多くの資料を収集、整理し、次に書かるべき部局史のための準備を、今後も継続して続ける体制が部内にできたことはよろこばしい。できれば独立した部局史資料室をいただいて、いつかは書かれるであろう、あるいは遂に書かれないであろう正史、裏面史、起居註の史料をここに集めたい。遂に書かれなかった資料についてはいつか水子供養でもしてやることにしよう。

低温センター

山本純也

現在大阪大学の中で最も小さな部局が低温センターです。そのため部局史執筆の依頼があったときこの仕事は大したことがないと考え、数カ月放っておきました。仕事の分担は低温センターの前身である極低温実験室から低温センター豊中分室に至るところを伊達教授が、低温センター吹田分室を山本助手が、低温センター業務を吉田助手が担当し、全体を大石センター長が調整するという形を早く決めていましたが、実際に執筆にかかったのは昭和五十五年十月からです。

原稿は伊達教授の担当部分が最も歴史的な事情の入るところであり大切なところですが、抜群の記憶力、整理力と速筆のおかげで、山本、吉田両助手担当のところの遅れが目立つことになりました。おかげでセンター長の修正も済ませて十二月中にすべてを完了することができました。

編集上特に苦労することはありませんでしたので思いつくことを次に書きます。一つの歴史的事実があっても、そこに至る事情は当時の担当者間で意見のくいちがうことがあるはずです。こういった場合部局史としては客観的事実のみを書くことになり、読者にとってあまり面白くないものになるでしょう。五十年史の裏話が本当に書けたら非常に面白い読み物となるのではないかという気はしています。歴史に及ぼす個人の力を高く評価する人と、そ

れに反対な立場の人があるようですが、大学史ではやはり人（最近では総長や部局長でなく、ある分野の発展に努力した一教授）の果たした役割は大きいと思います。更にその人を支えた出身地や家族構成、大学内外での共同研究者の輪、関連学問分野とのつながりなどを取り込んだ人物誌がこの五十年史の副産物としてできれば正史とはまた違った味のある読み物ができるのではないでしょうか。

附属図書館

山田信夫

この度の「五十年史」で、部局史の部には附属図書館をどのような形で入れるかについては、編集委員会でいろいろ議論があったと聞いている。図書館内部でもその間、その対応にやはりいろいろの意見が出ていたが、結局、中馬委員長以下の御努力で、現在考えられる最も妥当な形に落ち着いたことをうれしく思った。これが第一段階であった。次には誰が執筆するかということで、いささか物書きに馴れている教官職の者は併任の私一人だし、百数十人も数える図書館職員の誰にというわけにもゆかぬ。結局、当時の東米吉事務部長が、とくに阪大勤務の長い掛長クラスの諸君の資料蒐集その他での協力を得ながら、原稿作成に当ってくれこの件もかたづいた。東氏が、折から転勤の内示を受け身辺多事の中で、努力されてたことは忘れられない。

でき上った草稿には私も目を通し、若干手は入れた。いずれにしろ、その時まず、阪大図書館の歴史が如何に有為転変に満ちみちているかをあらためて痛感させられたものである。考えてみると、これは大阪大学そのもののこの五十年の歴史に相応じてのことにちがいない。加えて大学の附属図書館というものが、とくにわが国では大きく変貌しつつある、その反映でもある。その意味で、今回は止むを得なかったが、この限られた紙数には収めきれなかった諸事実を、せっかく集められた資料もあることだから、別の形でもまとめておくことも考えるべきかと思った。

実は今回「部局史雑感」の寄稿を求められたとき、東氏に協力された諸氏に集まってもらい、いろいろ話を聞いた。その時出た話では、やはり阪大の各部局の中でも、昭和六年の大阪帝国大学創設以来あるものとして、図書館の変りようは最もはげしいのではないかということが、みなこぞっての発言だった。医・理・工の三学部が揃ったとき、図書館職員は分館を入れて総勢一四名、それが今は、三課一八掛で定員外職員も入れて一二〇名前後になっている。このような話に関連して、大学全体の急速な発展のなか、資料が散佚していることにあらためて気付いたという。埋もれた資料は未だ幾らもあるはず、いまの中にその気になれば、それらを蒐集整理できるはずだ、とも言っていた。幸にして「五十年史資料・編集室」も出来たことだし、そこで是非進めてほしい。出来ることがあればお手伝いしたいと。これらは本当に阪大に育ち、阪大を愛する人たちの切実な声として、私は聞いたものである。

医学部

四方一郎

医学部の五十年史編集委員として二年にわたって原稿を集め、又自分でも筆を加えて来たが、医学部の歴史は大阪大学の前身の発足以来のものでありかなり長いものであるため、その内容が許された原稿枚数を越えるのが目に見えており、以前に出された、大阪大学医学伝習百年史を基礎にして、その縮小に努力するということになり、各教室の原稿もいきおいそういうことにならざるを得なかったものと推察される。

医学部の歴史は明治元年にはじまり、各教室の歴史の中にも発足当初からの歴史、即ち今回の五十年史の前史と見られる項目を容れなければならない

教室が多く、多少紙数の超過したものもあるが御許しを願いたいと思っている。

医学伝習百年の各教室の歴史がすでに出されているので医学部としての五十年史は書きやすかろうと思われたのであるが、なかなかさにあらず、短い文章の中にそれを全て収めることは、なかなか難かしいことである。現在なお全てが終ったわけではなく写真の選択に頭を悩ませている次第である。

医学部総記の下で記述に困ったのは、大学紛争当時の模様をいかに述べるかということである、医学部内の状況では特に封鎖という状態はなく、何か無難に事がはこんだ如くに見られるけれども、決してそうではなく、むしろ封鎖というようなはっきりした状態が生じ、それが解決された方が、後に残るしこりはなく、物事がはっきりしたように思えるけれども、そういう状態のないままに進行したために、あとに残された種々の問題が尾をひいて、すっきりしないままに時間を経過して来たという感じがするのである。しかしその時間の経過の中に努力がかさねられて、どうやら今日にいたったという感慨にうたれるのである。

医学部史編集後のうごきについて一言しておく。十五年前に遡るが医学部、微研、学友会が共催して大阪大学医学伝習百年記念が行われたが、その事業の一つに「医学博物館ないし資料館の設置」の一項があった。先進欧米諸大学には必ず設置されている大学ミュージアムにならい医学部にもというものであった。医学伝習百年修史作業中に収集した資料を核に収蔵品を漸次増加することが計画されていたが実現には至っていなかった。

医学部百周年、大学五十周年を経て、昨年十一月教授会で医学部に資料室を設け、さきの構想を小規模ではあるがうけついで、研究、教育に資するものにすることになった。現在準備委員会がその具体化の検討に入っている。これも五十周年記念の副産物の一つと考えてもよかろう。

大阪大学史紀要　原稿募集

〔紀要の構成〕

1　論文　五〇枚程度（四〇〇字詰）
2　研究ノート　三〇枚～四〇枚
3　日記・回想
4　資料紹介
5　読者のひろば（内容自由）

〔紀要の刊行〕

年一回～二回を予定しています。

紀要の内容については、わが国の近代高等教育の発達史との関連から本学の歴史を眺めるとともに、またわが国の大商工業都市という環境のなかではぐくまれてきた歴史を、前史時代を含めて広い視野のなかから把えたものにしたいと考えております。

本学はこれまで本格的な編史の試みがなされていないので、これを機に、本学の歴史に関連する広範囲の資料の収集に努力しており、それらに関する資料紹介もできるだけ収録する方針です。

執筆者についても、学内外を問わず、広く多くの人びとのご参加をねがって本紀要の内容の充実とともに、進行中の『大阪大学五十年史』をより内容の豊かなものにしたいと考えていますので、各位の積極的なご投稿をお待ちする次第です。

〔投稿先〕

豊中市待兼山町一―一
大阪大学附属図書館内
大阪大学五十年史資料・編集室
（電話）〇六―八四四―一一五一
内線二一〇一・二一〇五

編集室所蔵資料・図書目録（一九八二・一）

〈大阪大学関係〉

大阪大学歯学部十周年記念誌

十年のあゆみ　大阪大学溶接工学研究所

学友会会誌　一九八一

萬葉の旅—萬葉旅行一〇〇回記念文集—（大阪大学萬葉旅行の会より寄贈）

萬葉の旅—萬葉旅行一五〇回記念文集—（大阪大学萬葉旅行の会より寄贈）

大阪大学超高圧電子顕微鏡センター　DENKEN 創立十周年記念号

THE CATALOGUE OF OSAKA UNIVERSITY　一九五七～一九五八、一九五九～一九六〇、一九六一～一九六二

OSAKA UNIVERSITY CATALOGUE　一九六三～一九六四、一九六五～一九六六、一九六七～一九六八、一九七〇～一九七一

OSAKA UNIVERSITY GENERAL INFORMATION　一九七二～一九七三、一九七四～一九七五、一九七六～一九七七

OSAKA UNIVERSITY BULLETIN　一九七九～一九八〇

大阪薬学専門学校卒業アルバム複刻版　Zum Andenken Pharmazentisch Fachschüle（寄贈）

大阪大学アジア医学踏査隊報告書

大阪大学蛋白質研究所十年のあゆみ

北斗　創刊号　特集—大阪大学の五〇年をたどる

〈伝記・記念誌〉

わたしの道・萬葉の道—犬養先生を祝う—（大阪大学萬葉旅行の会より寄贈）

伊藤忠兵衛翁を偲んで（産業科学研究協会より寄贈）

菊池正士業績追想（杉本健三氏より寄贈）

緒方洪庵と適塾

〈大学・高等学校年史関係〉

神戸女学院百年史　各論（寄贈）

東京都立大学三十年史（寄贈）

北大百年史　札幌農学校史料(一)（寄贈）

四十年のあゆみ　帯広畜産大学創立四十周年記念誌（寄贈）

同志社談叢　創刊号（寄贈）

東京大学史紀要（寄贈）

島根大学史（寄贈）

百年史　京都市立芸術大学（寄贈）

東京農工大学百年の歩み（寄贈）

早稲田大学史紀要　第二巻、第一〇巻、第一四巻（寄贈）

琉球大学三十年　一九八〇年刊（寄贈）

大学基準協会十年史　昭昭二二～三二年（寄贈）

旧制高等学校全書　第二巻　制度編

旧制高等学校全書　第三巻　教育編

旧制高等学校全書　第四巻　校風編

〈大阪関係〉

大阪府教育百年史　第一巻　概説編（寄贈）

大阪府教育百年史　第二～四巻　史料編（寄贈）

大阪府史　第一巻　古代編

大阪府史　第三巻　中世編Ⅰ

大阪府史　第四巻　中世編Ⅱ

（明治・大正）大阪市史　第一巻　概説編
（明治・大正）大阪市史　第二～四巻　経済論
（明治・大正）大阪市史　第五巻　論文編
（明治・大正）大阪市史　第六巻　法令編
（明治・大正）大阪市史　第七巻　史料編
（明治・大正）大阪市史　第八巻　総目次年表索引
大阪市会史　第二四巻
大阪商工会議所百年史（寄贈）
大阪府議会史　第五編
大阪の歴史　井上薫編
大阪蘭学史話　中野操
大坂と大阪の研究　伊吹順隆
大阪の除痘館うつりかわり　財団法人洪庵記念会
大坂の町名　大阪町名研究会編
大阪古地図物語　原田伴彦・矢守一彦・矢内昭
大阪地方の史的研究　黒羽兵治郎先生喜寿記念会編
北区史
中之島誌（復刻版）臨川書店
豊中市農業の歴史　豊中市農業委員会（寄贈）
写真集　明治・大正・昭和の豊中　図書刊行会
難波大阪　全三巻　歴史と文化、郷土と史蹟、美術と芸能
平野含翠堂史料　梅溪昇・脇田修編
大阪建設史夜話、大阪古地図集成　大阪都市協会

編集室日誌より

昭和五六年三月　実行委員会幹事会開催
部局史原稿調整（～八月下旬）（中馬委員長・事務局・編集室）
紀要第一号校正（～四月中旬）
国立公文書館へ資料調査（創立前史の資料について、大西）
印刷所見学（写真集委員会・編集室）
『写真集大阪大学の五十年』発刊
四月　写真集小委員会開催（絵ハガキ発行について検討）
実行委員会幹事会開催
実行委員会開催
部局史タイプ稿作成決定
所蔵図書・資料カード作成
収集写真整理・分類（～五月）
大阪大学創立五十周年記念絵ハガキ発行
『大阪大学史紀要　第一号』発行
五月　大阪大学五十周年記念式典挙行（於、中之島大阪大学講堂）
同記念祝賀会（於、ロイヤルホテル）、同記念講演会（於、ロイヤルNBC会館）
大阪大学名誉教授赤堀四郎氏座談会（於、待兼山会館）
文科系部局史編集委員長会議
国立公文書館へ資料調査（熊谷、松田）
六月　写真集・紀要発送
第一回通史編集委員会開催

実行委員会幹事会開催
紀要第二号の原稿執筆依頼
写真集小委員会開催（借用写真の後始末等について）
三木市　伊東操宅へ医学教育関係資料調査（松田、大西、塚本）
写真集再版のための準備開始
七月　写真カード整理開始（～続行中）
総長、中馬委員長、梅溪副委員長会談（通史編集事業について）
第二回通史編集委員会開催
写真集再版発刊決定
八月　部局史タイプ校正
九月　蒜山セミナーハウスへ写真集再版用の写真撮影（大西・塚本）
第三回通史編集委員会（通史目次案第一次案戦前編検討）
借用写真の返却開始（～十二月）
大阪大学法学部名誉教授石本雅男氏、同大阪谷公雄氏、同小野木常氏座談会（於、待兼山会館）
十月　第四回通史編集委員会（通史目次案第一次案戦後編検討）
実行委員会幹事会開催
国立国会図書館へ、文教委員会、大学予算関係資料調査（熊谷、大西）
国立公文書館へ資料調査（松田）
国立科学博物館へ長岡半太郎関係資料調査（塚本）
京都大学基礎物理学研究所へ湯川秀樹関係資料調査と写真撮影（大西）
十一月　実行委員会幹事会開催
部局史タイプ稿を各部局へ発送
十二月　編集実行委員会・部局史編集委員長連絡会議の合同会議（部局史の記述について他）
第五回通史編集委員会（通史目次第二案検討）
昭和五七年一月　第六回通史編集委員会（各部局にて）
部局史原稿修正開始
二月　「名誉教授称号一件」資料整理開始
人物カード作成開始
日本語ワードプロセッサーによる編集の研究
三月　第七回通史編集委員会（通史目次第三次案検討）
実行委員会幹事会（通史目次、部局史仕様案検討）
部局史修正原稿提出締め切り

大阪大学史紀要　第一号　正誤表

ページ・段・行	正	誤
37　下段5行目	民俗博物館	民族博物館
41　写真説明	明治2年5月23日	明治25年5月23日
84　上段右6行目	法文学部の創設	法学部の創設
92　上段右14行目	田内(静三)	田淵

編集後記

◇紀要第一号を創刊してからすでに一年を経過しようとしている。第一号にたいする読者からの反響は褒貶さまざまにわたったが、次号以降の継続希望の方が予想を越えて多数にのぼり、目下増部数の必要に迫まられている。これをもって編集室では、まず好評であったと自讃している次第。

本号収載論文には阿部彰、宮本又次、三谷裕康の三氏から三篇を頂戴した。阿部論文は本学創設時の文政審議会での審議の様子とその背景の考察が扱われていて、五十年史編集には不可欠の部分である。山口玄洞は本学医学部、微研にとっては大恩人の一人であるが、宮本論文は彼の立志伝的な生いたちと商業経営の追跡をとおして、大阪が生んだ特異な商人像を紹介された。三谷論文は先きに刊行した『写真集　大阪大学の五十年』収載の略史として執筆されたものである。写真集では紙数の関係で短縮を余儀なくされたが、本号ではその全文を掲載した。

（松田　武）

◇本号では座談会の記事が三つ入ることになった。法文学部創立のころの様子を、多くの先輩方の証言を得て、現時点ではっきりつかんでおきたいとの意向から、同じような内容の座談会を二つ入れたためである。文学部座談会は開かれてからもう二年半もたってしまい、ご出席者のうち天野利武名誉教授が昭和五十五年十二月に物故された。

産研座談会は同研究所創立四十周年記念行事の一環として行なわれたものを掲載させていただいた。

座談会編集担当は次の各氏。

法文学部の創設と文学部　梅溪、脇田
法学部の今昔をめぐる　熊谷
産業科学研究所四十年のあゆみ　原田

（大西　愛）

◇五十年史部局史編はタイプ原稿を作り終え、各部局で修正中、新年度早々より本印刷にかかる予定である。また、通史編の方は、第一次目次案に基づいて、これから執筆者について検討するところである。五十七年度はこのように部局史・通史の両方の編集を少ない人員ですすめなければならないため、新しい機械を入れて編集作業に大いに役立てようと一同はりきっている。

◇第三号原稿募集は一〇一ページ参照のうえ、ふるって、ご投稿くださるようお願いします。

なお本紀要編集委員のうち、原田篤也氏は本年四月一日付で退官されたので、編集委員は次の各氏。

中馬一郎（委員長、医学部）
梅溪昇（文学部）
脇田修（文学部）
熊谷開作（法学部）
作道洋太郎（経済学部）
芝哲夫（理学部）
堀川明（工学部）
水野克彦（教養部）

（塚本文子）

大阪大学史紀要　第二号

昭和五十七年五月二十日　発行
編集　大阪大学五十年史資料・編集室
発行　〒560　豊中市待兼山町一―一
大阪大学附属図書館内
電話　〇六（八四四）一一五一
内線　二一〇一・二一〇五
印刷　河北印刷株式会社
〒601　京都市南区唐橋門脇町二八
電話　〇七五（六九一）五一二一